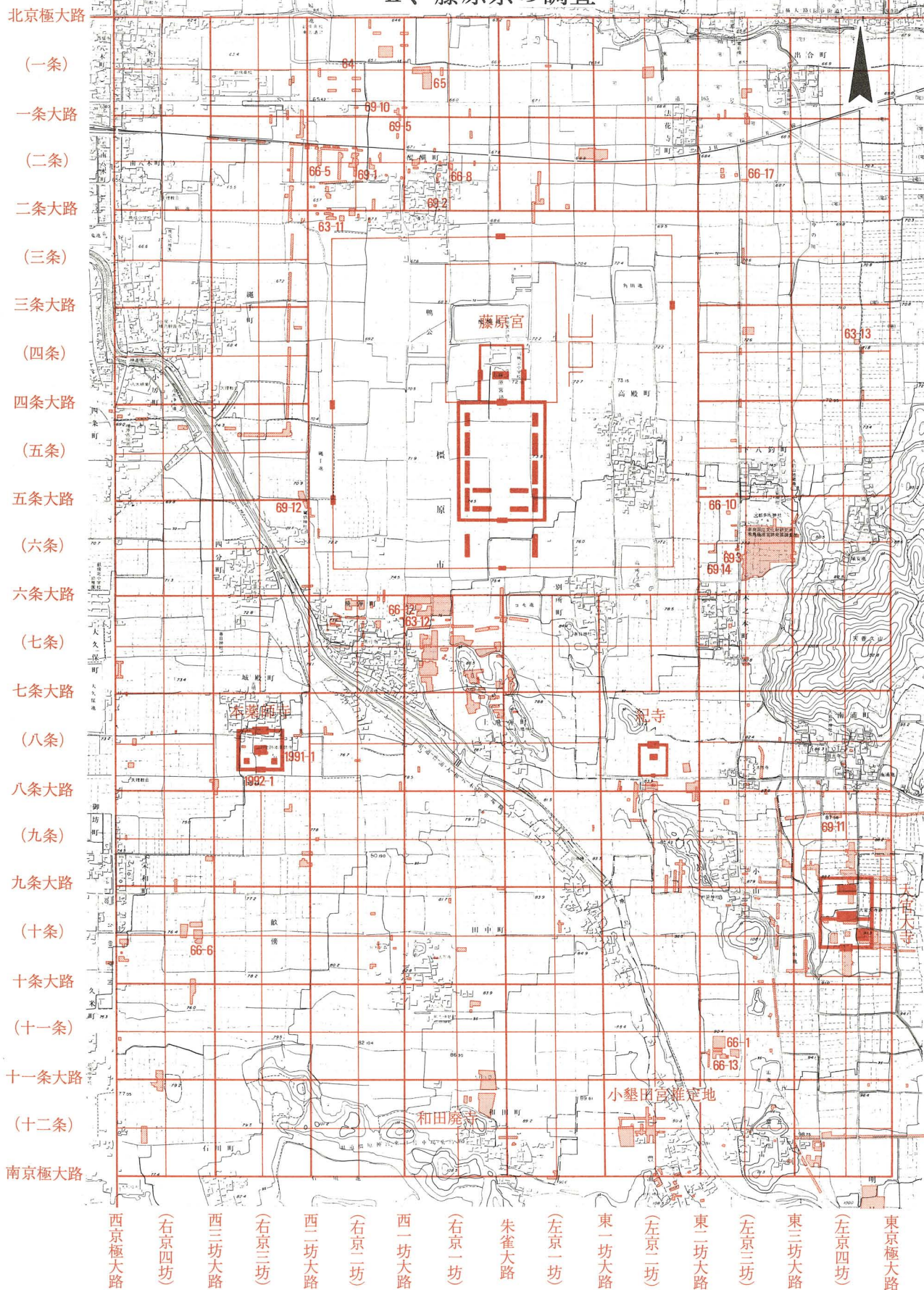


Ⅱ、藤原京の調査



第21図 藤原京調査位置図

0

500m

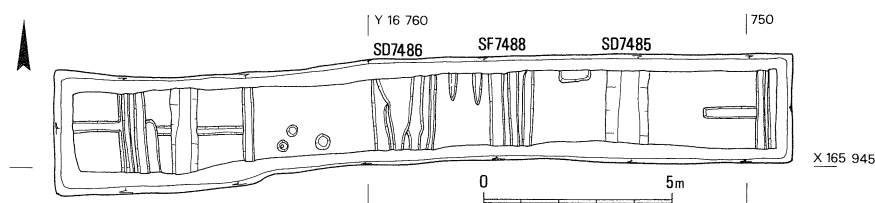
1、左京二条三坊の調査（第66－17次）

（平成四年三月）

この調査は、住宅建設に伴う事前調査として橿原市膳夫町で行ったものである。調査地は左京二条三坊にあたり、東三坊坊間路の存在が推定された。調査は東三坊坊間路の推定位置に東西19m、南北3.5mの調査区を設定して行った。

層序は、上から順に耕土、床土、茶褐色土（整地土）である。遺構は耕土から0.7m下の茶褐色土上面で検出した。

検出された主な遺構は東三坊坊間路とその東西両側溝である。調査区中央で検出された東三坊坊間路SF7488は路面幅が5.5mで、東側溝SD7485は幅1.1m、深さ0.43m、西側溝SD7486は幅0.8m、深さ0.2mである。東西両側溝の溝心々距離は6.3mある。



第22図 第66－17次遺構実測図（1：200）

2、左京六条三坊の調査（第69－3次）

（平成四年五月）

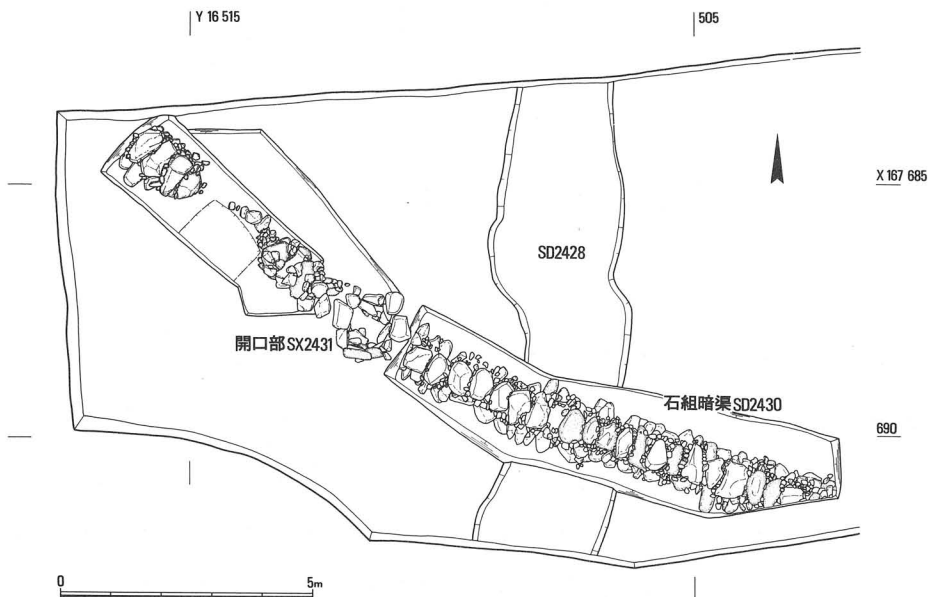
この調査は、個人住宅改築に伴う事前調査である。調査地は橿原市木之本町で、左京六条三坊西南坪内の東北部にあたる。調査は南北4m、東西3mの調査区を設定して行った。その結果、現地表下0.7mで遺構面に達し、浅い土坑を2基検出した。遺構面の東端は地山で、地山は東から西に向かって急激に落ち込んでおり、この落ち込みは土坑より古い大きな南北流路の東岸である可能性がある。いずれも伴出遺物はなく、時期は不明である。

3、左京九条四坊の調査（第69－11次）

（平成四年十一～十二月）

この調査は、橿原市戒外町から明日香村小山の村道耳成線に至る市道建設に伴う事前調査である。工事は平成二年に敷設された農道を南北に拡幅するもので、既設の農道部分については当調査部が昭和六十二年度から平成元年度にかけて、第54－25・58－20・60－17次の3次にわたる調査を実施した（『概報』19～21）。これらの調査では、条坊道路を検出できなかったものの井戸・溝・土坑など藤原京関連の遺構を検出した。また従前の調査で判明していた、大官大寺北西一帯に広がる7世紀中頃の大規模な整地土が東西幅約390mにも達することを確認した。特に第58－20次ではこの整地事業に伴う大規模な石組暗渠を検出した。今回の調査は、道路を南北に拡幅する工事であることによる制約などから、石組暗渠部分を中心として行うこととし、前回実施した第60－17次調査区も含んで調査区を設定した。

調査区内における層序は、上から耕土・床土・暗灰土の順で、その下が7世紀中頃の整地土である黄褐粘質土、さらにその下が灰黒色粘土となる。遺構検



第23図 第69－11次調査遺構実測図（1：150）

構検出は整地土上面で行った。石組暗渠は整地土で覆われているため、前回の調査で判明している石組暗渠の向きに従って整地土を掘り下げ、天井石部分を検出した。

主な検出遺構は南北溝と石組暗渠で、いずれも前回検出したものの続きである。

南北溝SD2428は幅2.5m、深さ0.65mで、埋土は暗灰色粘質土と整地土である黄褐色粘質土のブロックを含む灰褐色砂質土である。埋土からは藤原宮期の土器類・瓦類が出土した。

石組暗渠SD2430は、前回、方形の開口部SX2431とそこから東南方向に長さ3m分、西北方向に長さ1m分の天井石を確認したが、今回は新たにその続きを東南方向に6m分、西北方向に3.5m分検出した。底面での幅は0.4m～0.45mで、深さは0.6～0.65mである。底石はなく、暗渠内には礫がぎっしりと詰まっていた。底面のレベルは西が低く、東が高い。石組暗渠の構築は次のように行われている。すなわち灰黒色粘土面を0.25～0.3m掘り込み、掘り込み面に接して最下段の側石を据え、その上にさらに2～3段側石を積んで天井石をのせる。天井石は長さ70～80cm大で、継目の隙間には小石をかませ、天井石と側石のあいだおよび側石相互のあいだに粘質土を詰める。天井石上面までの整地の状況は北と南で異なり、南側では黄灰色の粘質土でマウンド状に側石・天井石をつつみこむが、北側では天井石の高さまで砂を入れている。場所によって天井部分を覆う盛土の厚さは異なるが、土入れの順序は、まず天井石の南側に粘質土を薄く置き、次いでその上に北から粗砂をかけている。開口部から東では粗砂は極めて薄い、西では側石北側の粗砂が天井石の高さを越え、天井部で0.1m近い厚さがある。この上に0.3mの厚さで整地土である黄褐色粘質土が置かれている。暗渠部分での整地土の厚さはほぼ1mにも達する。

今回の調査では7世紀中頃の石組暗渠を長さ13.5mに亘って確認した。また新たに暗渠埋設に伴う整地の状況がその北と南で異なり、埋土の質も全く違うことが判明した。このことと関連して暗渠内が礫で充填されていた点も注目される。また礫間には水粘状の粘土がたまるが、粘土中に寄生虫卵が皆無で（天理大学附属天理参考館金原正明氏の分析）、ゴミも全くみられなかった。これ

らのことから、この石組暗渠を下水施設とするには問題がある。調査区付近は地形的に北側が高く、発掘時においても整地土の砂層から湧水が激しかった。あるいは北からの水をこの石組暗渠で受け、開口部で汲み上げたのかもしれない。いずれにしても今後石組暗渠のはじまりと行先を明らかにすることがその機能や性格を解明するために必要である。

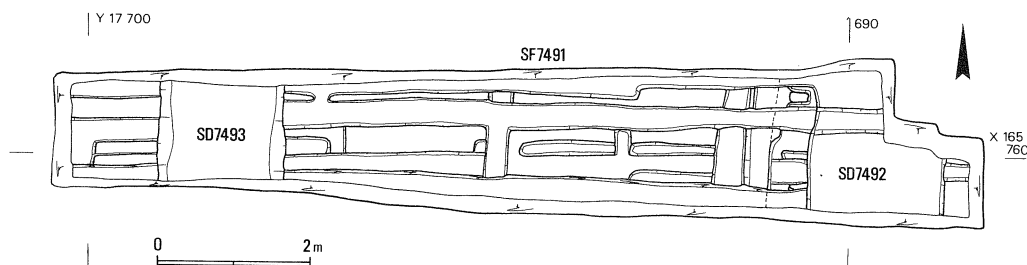
4、右京一条一・二坊の調査（第69－10次）

（平成四年十一月）

この調査は、橿原市醍醐町の国道165号線歩道拡幅工事に伴う事前調査として行ったものである。工事が右京一条の一坊西南坪と二坊東南・西南坪とにまたがる狭長なものであることから、調査は工事区間が横断する西一坊大路と西二坊坊間路の検出に努めることとし、西一坊大路推定位置に東調査区（東西10m、南北2m）、西二坊坊間路推定位置に西調査区（東西11m、南北2m）を設けて実施した。調査面積はあわせて42㎡である。

東調査区の層序は、上から順に耕土、床土、黄褐色土、暗灰褐色砂質土（整地土）、灰褐色砂土（地山）であり、耕土下0.6mの暗灰褐色砂質土上面で遺構を検出した。主な遺構には西一坊大路がある。

西一坊大路SF7491の東側溝SD7492は、幅2.3m、深さ0.4mの素掘りの溝で、暗灰褐色土で埋められ、底には砂が薄く堆積する。西側溝SD7493は幅1.6m、深さ0.35mの素掘りの溝で、埋土等は東側溝と変わらない。東西両側溝の溝心々距離は8.4mであり、両側溝の内側で計測した西一坊大路の路面幅は6.3mとなる。

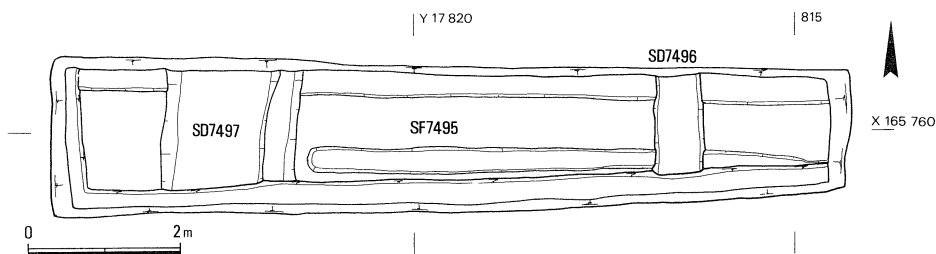


第24図 第69－10次調査東調査区遺構実測図（1：100）

西調査区の層序は、上から順に耕土、床土、黄褐色土、暗褐色砂質粘土（整地土）、黄灰色微砂（地山）、灰色粗砂（地山）であり、遺構は耕土下0.6mの暗褐色砂質粘土上面で検出した。主な遺構には西二坊坊間路がある。

西二坊坊間路SF7495の東側溝SD7496は幅0.6m、深さ0.23mの規模である。これに対して西側溝SD7497は上端で幅1.8mと幅広く、深さも0.5mと深い。東西両側溝の溝心々距離は5.9mであり、西二坊坊間路の路面幅は4.7mである。ただ西側溝SD7497はその東壁が段をなしており、上半を溝の溢れによるものであるとした場合、溝心々距離は6.25m、路面幅は5.4mとなる。

条坊関係遺構出土の遺物は、いずれも藤原宮期に属するものであるが、その中で西一坊大路東側溝出土土器に東国系の黒色土師器杯と思われる破片が含まれている。これまで飛鳥地域の石神遺跡に特徴的に出土した土器であり、藤原京の条坊関連遺構から出土したことは注目されよう。



第25図 第69-10次調査西調査区遺構実測図（1：100）

5、右京二条一坊の調査（第69-2次）

（平成四年四～五月）

この調査は、納屋建設に先だつ事前調査である。調査地は橿原市醍醐町で、右京二条一坊にあたる。調査は敷地の西寄りに南北12m、東西2mの調査区を設定して行った。層序は上から順に黒灰色土・赤褐色土・淡灰赤褐色土で、その下の現地表下0.6mにある暗茶灰褐色砂質土が遺構面となる。検出した藤原宮期の遺構は南北溝SD7750のみであるが、SD7750もその東岸を検出したにとどまり、その規模や性格などは不明である。

6、右京二条二坊の調査（第69－1・5次）

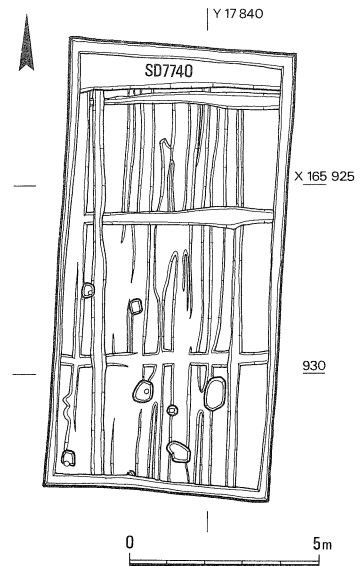
ア、第69－1次調査

（平成四年四月）

この調査は、住宅建設に伴って橿原市醍醐町字長谷田で実施した事前調査である。調査地は右京二条二坊西南坪の東北部にあたり、周辺では第54－23・58－16・60－19次の各調査などが行われている（『概報』19・20・21等）。

調査区内の層序は、上から耕土・床土・暗灰褐色砂質土の順で、現地表下0.3mで遺構面である暗褐色粘質土・橙褐色砂質土に至る。

検出した主な遺構は藤原宮期の東西溝1条である。東西溝SD7740は調査区の北端で検出した素掘りの溝で、現状で幅1m、深さ0.2mある。この溝は当該坪の北にある二条条間路南側溝SD6331から溝心々距離で南へ8mに位置する。なおこの他に柱穴と思われる小穴数個を検出したが、建物・塀などにまとめることができない。



第26図 第69－1次調査遺構実測図（1：200）

イ、第69－5次調査

（平成四年八～九月）

この調査は、敷地造成工事に伴って橿原市醍醐町で実施したものである。調査地は右京二条二坊東北坪にあたり、一条大路の推定位置を含むため、東西3m、南北19.5mの調査区を設定して調査を行った。なお今回の調査区の北に隣接したところで第41－9次調査が行われている（『概報』15）。

調査区の層序は、上から盛土（厚さ0.8m）、耕土、床土、灰褐色土、暗褐色土と続き、地表面から1.5mで茶褐色粘質土上面に至る。遺構はこの茶褐色粘質土上面で確認した。

検出した遺構には、一条大路とその南北両側溝があり、他に中世の小溝や小穴などがある。一条大路SF6250は調査区の北半で検出した。北側溝SD7766は幅1.9m、深さ0.3m、南側溝SD7767は幅1.1m、深さ0.2mの素掘り溝である。この両側溝から復原される一条大路の規模は、路面幅7.5m、溝心々距離で9mあり、これまでの調査で知られている数値にはほぼ等しい。なお暗褐色土から土馬が、側溝から須恵器の杯蓋を転用した硯などが出土した。

7、右京七条一坊の調査（第66－12次）

（平成四年一～二月）

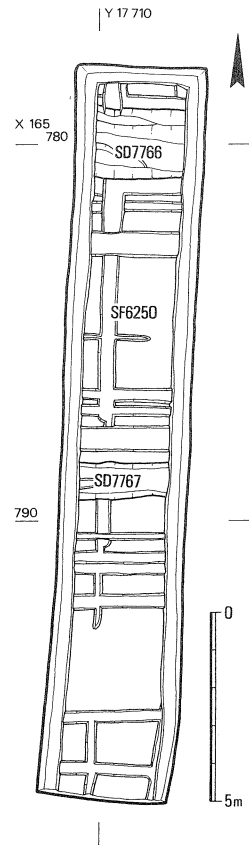
この調査は、宅地造成工事に伴い橿原市高殿町で実施したものである。調査地は藤原宮の南面西門に近い右京七条一坊西北坪にあたり、同坪内ではこれまでに、第17・19・62・63次等の調査が行われている（『概報』6・7・20・21等）。

調査区の基本的な層序は、上から盛土（厚さ0.15m）、耕土、床土、二番床土、灰褐色土と続き、地表面から0.9mで暗灰色粘質土上面に至る。藤原宮期の遺構は暗灰色粘質土上面で確認できた。

検出した主な遺構には、掘立柱建物1棟、南北溝2条、トイレ遺構1基があり、他に小溝や小穴などがある。

掘立柱建物SB7422は調査区の南半にある2間×3間の東西棟総柱建物で、柱間寸法は梁間が1.9m等間、桁行は西2間が2.4mで、東1間が1.9mである。柱穴は深さ0.2mほどしか残っておらず、遺構面が少なくとも1m近く削平をうけていることがわかる。

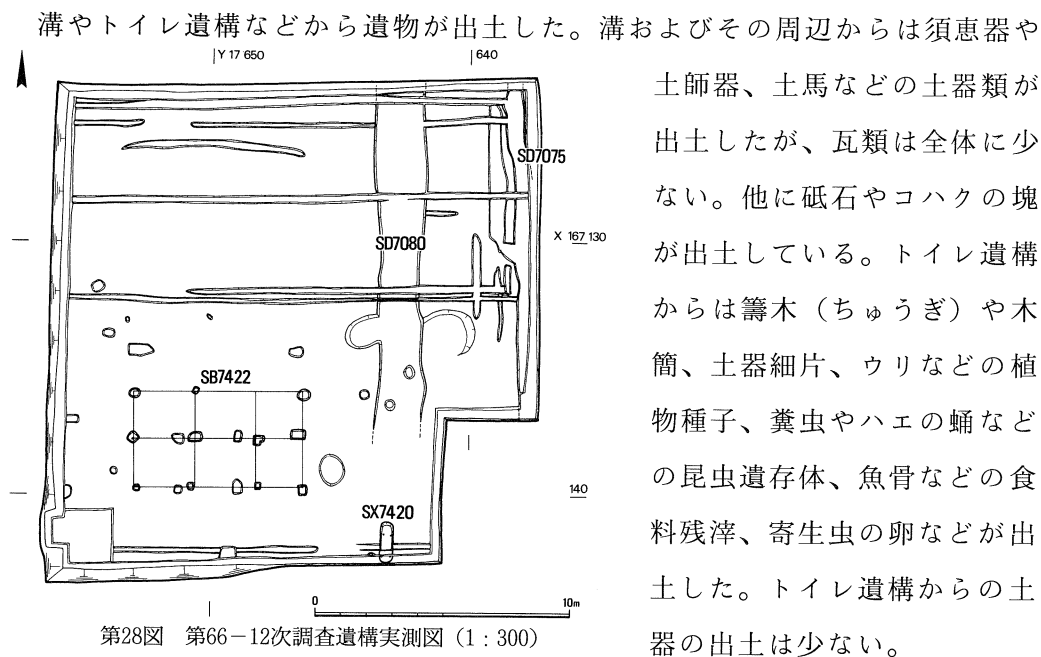
南北溝SD7075は、調査区の東端で確認した幅0.9m、深さ0.5mの溝で、藤原宮期の土器が出土した。この溝の西で検出した南北溝SD7080は、幅1.5m、深



第27図 第69－5次調査遺構実測図（1：200）

さ0.2mである。調査区の南半では土器や木片などを含むシルト層が広がっており、溝の範囲は不明瞭であった。同じく藤原宮期の土器を出土するが、重複関係からすると後述するトイレ遺構SX7420よりは古い。この2条の南北溝とも、北の第63次調査区や南の第63-12次調査区へと続いている。

調査区の東南隅付近で発見されたトイレ遺構SX7420は、長さ1.6m、幅0.5mの長楕円形の素掘りの土坑で、長軸を正しく南北方向に置く。深さは現状で0.4mをとどめるが、前述した柱穴等の遺存状況からすると、本来1m以上の深さを持っていたようだ。土坑の掘形は、短辺側ではゆるやかに傾斜をつけ、長辺側ではほぼ垂直に近い角度で掘り込まれていた。また土坑内には東西0.3m、南北0.85mの間隔で4本の木杭が打ち込まれていた。いずれも直径2cmほどの小枝を利用した杭で、先端を尖らす以外に特別の加工はない。最も長いもので土坑の底から0.4mの深さまで打ち込まれていた。なお内部には粒子の細かい艶のある黒色土が詰まっており、木簡や板状木製品、ウリの種子の堆積がとくに目を引いた。これらの特徴からこの遺構をトイレ跡と判定し、埋蔵文化財センターの協力を得て、内部の堆積土をすべて採取し、各種の分析を行った。その結果、この遺構がトイレであることが科学的にも判定された。



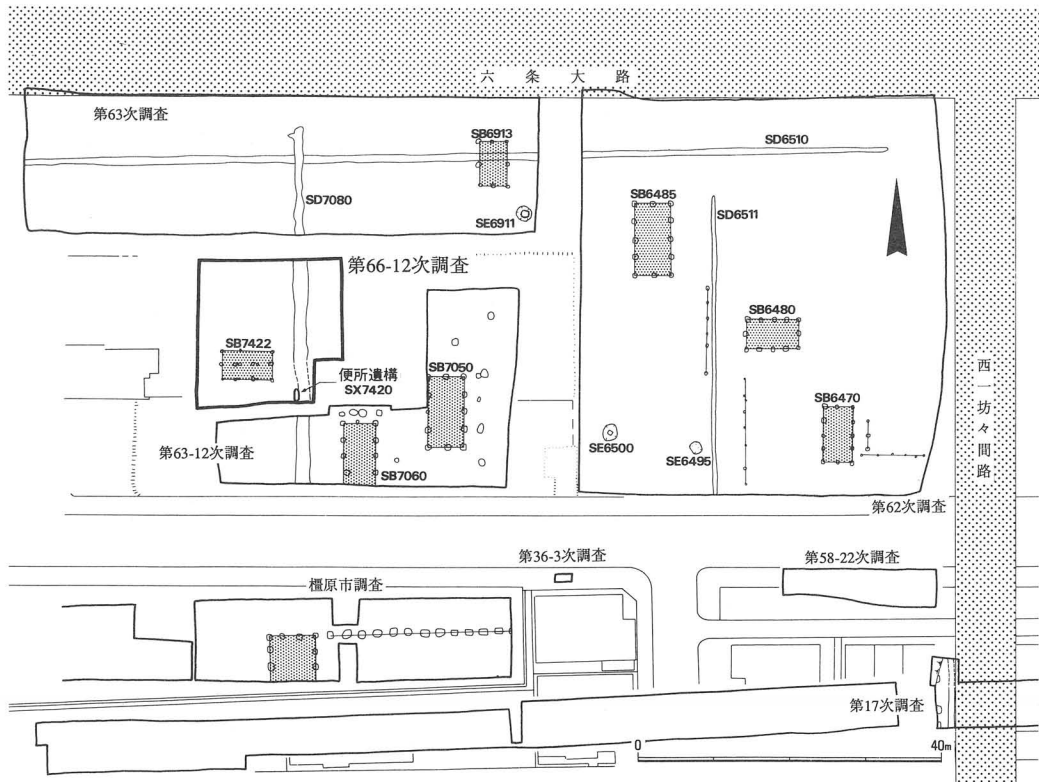
木簡は全部で41点（うち削屑17点）出土した。そのうち遺構SX7420から30点（うち削屑15点）、溝SD7080の南半部にあたるシルト層から11点が出土した。当坪では以前に行われた第62次調査で藤原宮期の井戸から削屑24点が出土し（『飛鳥・藤原宮発掘調査出土木簡概報』10）、また第63－12次調査でも今回の調査区の南辺に接する位置で検出した3基の土坑から723点（うち削屑703点）の木簡が出土した（『概報』22）。今回出土した木簡は、同じ坪内で行われた第62次・第63－12次両調査で出土した木簡とも関連付けて理解する必要がある。これまで当坪で出土した木簡の特徴として、第一に藤原京域では最も多量の木簡を出土し、しかもその大部分が削屑であること、第二に削屑の中には所謂横材の木簡がかなりの数を占めること、第三に「戸主」などと記したものがあること、などを挙げることができ、さらに今回出土したものの中に「下戸雑戸戸主雑戸下戸戸主」「百済手人下戸戸主」と表裏に記したものがある。これらの特徴は、当坪に官衙ないしは官衙に関連した施設が置かれていたことを示唆している。

これまでの調査で判明した当坪内の建物は、いずれも2間×3間や3間×3間程度の小規模なもので、それらが溝や塀で区切られた小区画内に井戸などを伴って点在する様子が明らかになっている。そこからは「貴族の邸宅」の雰囲気はうかがえない。一方、出土遺物からしても戸籍などに関連した木簡の記載内容や硯（転用硯）の出土が比較的多いなど、公的な機関（役所）の存在を暗示する。もしこの想定が正しいとすると、今回確認したトイレ遺構は、役所内に設置された共同便所とみるべきなのであろう。

トイレ堆積土の分析のうち、寄生虫卵の検出が特に注目される。これは考古資料として我が国最初の発見例であり、藤原宮期における寄生虫蔓延の様子を伺い知ることができた。今回確認された寄生虫卵は回虫・鞭虫・肝吸虫・横川吸虫の卵であり、これらは独自の生活史を有するため、それを手懸かりとして当時の食生活を復原することができる。特に回虫・鞭虫卵の存在は野菜を生で食する習慣のあったことを物語る。さらに想像をたくましくすれば、人糞肥料の畑への利用も考えられる。しかし一方、今回、便池内に多量の籌木が投棄さ

れていることからすると、肥料としての使用を想定するには不適當な行為であり、人糞肥料の問題については更に検討が必要であろう。いずれにしても寄生虫卵の発見は、古代の食生活のみならず、衛生や医療の分野にも資料を提供し、さらにはこれまで断定することができなかったトイレ遺構の判定にも大いに力を発揮してくれる。更に類例が増えることに期待したい。

なお本調査で発見したトイレ遺構SX7420については、別に『藤原京跡の便所（トイレ）遺構－右京七条一坊西北坪－』（奈良国立文化財研究所 平成四年）を刊行し、遺構や出土品の概要、堆積土の分析結果などをまとめているので、参照されたい。



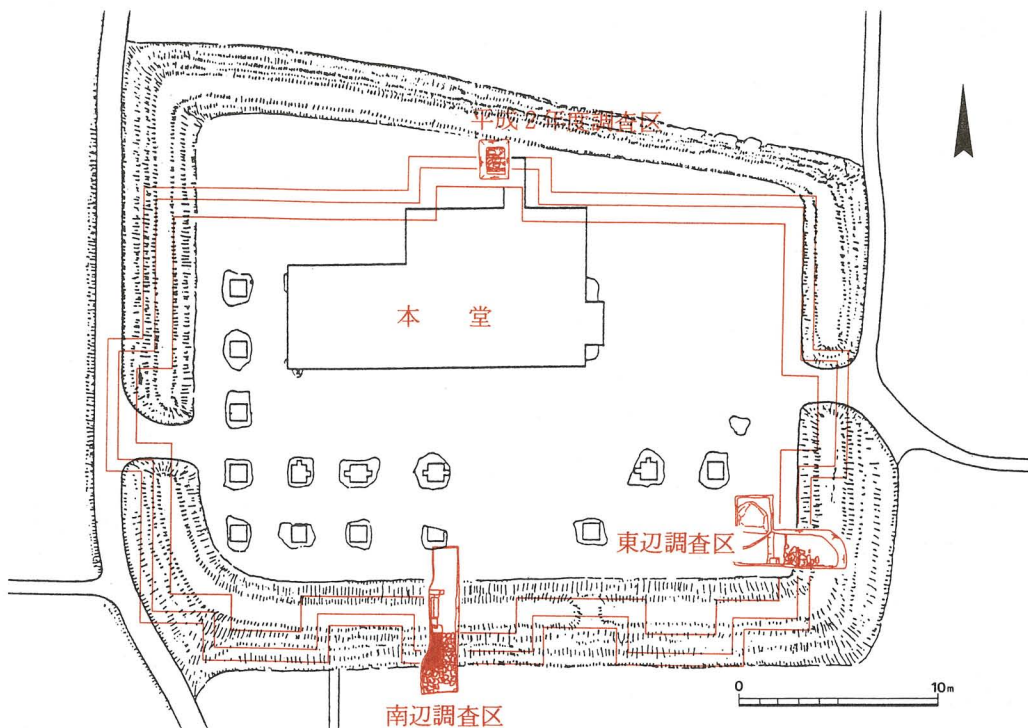
第29図 右京七条一坊西北坪（北半部）藤原宮期遺構図（1：1000）

8、本薬師寺の調査（1991－1次）

（平成四年三月）

この調査は、橿原市城殿町に所在する史跡本薬師寺跡の調査を今後継続的に
行っていくために、金堂跡で実施した予備調査である。

藤原京右京八条三坊を占める本薬師寺ではこれまでに4回の調査が行われて
いる。まず昭和五十一年の寺域西南隅の調査では藤原京八条大路与西三坊大路
の交差点を検出し、また条坊道路施行より古く、寺域の西を限る施設に関連す
るとみられる南北溝を検出した（『概報』6）。また昭和五十八年に行った寺域
東半部の調査では寺造営前からの自然流路を検出した（『概報』14）。この流路
は造営の終了する7世紀末頃には整地されたことが確認され、日本書紀にみえ
る造営経過と一致する状況が明らかとなった。平成元年には西面回廊のすぐ東
側で調査を行ったが、遺構面は削平されていた（『概報』20）。さらに平成二年、
庫裡改築に伴って、調査面積2.7㎡と小規模ではあったが、初めて金堂北辺中



第30図 本薬師寺1991－1次調査調査位置図

中央部の調査を実施した（『概報』21）。その結果、平城京薬師寺と同様、北面階段の北を巡る石組の雨落溝と基壇周辺の玉石敷を検出し、金堂の遺存状態が良好であることを確認した。

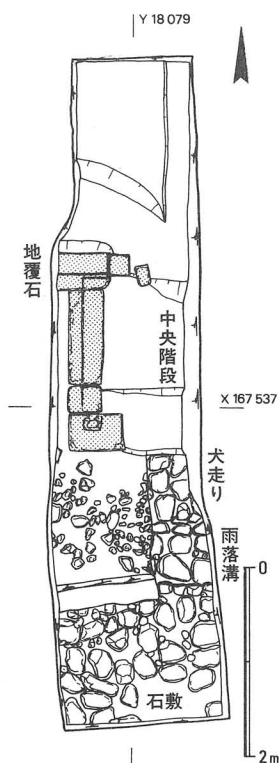
今回の調査は、平成二年の調査成果を受け、金堂基壇の残存状態の把握、金堂の基壇規模の確認などを目的として、現在の土壇の南辺中央部と東辺南部の2箇所小さな調査区をそれぞれ設定して行った。

南辺調査区 金堂基壇の南辺部ほぼ中央に東西2m、南北7.5mの調査区を設けた。北は土壇上に残る南側柱列の西から4つ目の礎石下まで、南は土壇下端から南1.7mまでである。調査の結果、金堂基壇南辺の地覆石、中央階段西側の地覆石、階段に伴う犬走りと雨落溝、雨落溝南方の石敷などを検出した。

金堂跡南辺では中央階段西側との取り付け部の基壇地覆石を検出した。6～7cmほど階段部に入り込むだけで、これより東には地覆石を引き通さない。地覆石は幅40cm、高さ40cmであるが、長さは不明である。羽目石との相欠きの仕口は幅23cm、深さ2cmである。上面には羽目石のあたりが幅3cm認められる。右下隅には階段耳石との相欠き仕口がある。この地覆石東には方形の凝灰岩切石が残り、わずかに地覆石にのっている。

中央階段西側の地覆石は3石残存する。幅38cm、高さ38cmで、北のものは長さ1mあり、真中のものは長さ30cmで、耳石との相欠きは基壇地覆石の仕口と同じ寸法である。南のものは階段西南隅の地覆石である。長さ58cmで横長に据えられ、上面に縦と横が19cmと14cmで、深さが8cmほどの耳石を受ける枅穴がある。なお階段前面の地覆石は抜き取られている。

階段の南は玉石敷の犬走り・雨落溝となり、雨落溝の南方にも玉石敷が広がる。犬走りは幅0.9mで、地覆石南端上面から0.15m下に20～30cm大の玉石を2～3列並べ、雨落溝の側石にはやや小ぶりの玉石を横方向に



第31図 南辺調査区遺構実測図 (1:80)

用いる。雨落溝の幅は0.53～0.55mで、深さは0.1mである。側石と石敷面は同じレベルにある。現水田面からの深さは0.25mと浅い。溝南方の石敷は1.5mまでを確認した。これら基壇周囲の遺構は後に埋められ、玉石敷面の0.1m上に瓦や小礫を敷いた時期があるが、その年代については不明である。

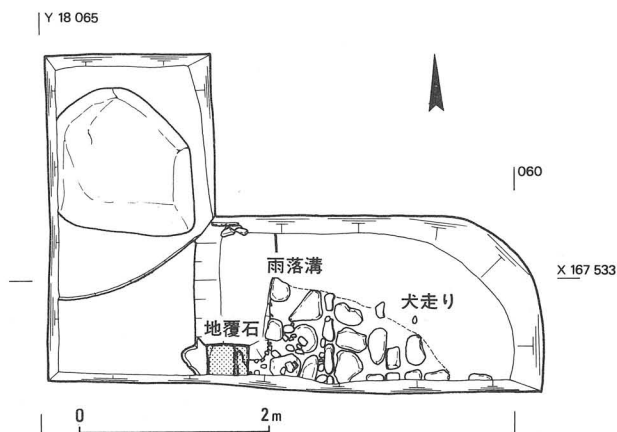
東辺調査区 土壇の東辺南側に幅1.8mでL字状に東西5.2m、南北3.5mの調査区を設けた。基壇東辺の地覆石、犬走り、雨落溝、雨落溝東方の石敷、落とし込まれた礎石などを検出した。

調査区南壁にかかって基壇地覆石が長さ30cmほど残る。その北側の石は抜き取られているが、北壁に次の地覆石が顔を出す。これは抜き取りの際動いて傾斜しているが、南北方向の位置が大きく動いていないとすれば、2石の間は1.25mとなり、地覆石の一つの大きさを、幅43cm、高さ38cmで、羽目石との相欠きは幅25cm、深さ1.4cmと推定できる。地覆石の上面には3cmほどの羽目石のあたりが残る。

地覆石東方には玉石敷の犬走りと雨落溝があり、その東方にも石敷が認められる。犬走りは幅0.9mで、地覆石上面から0.2m下に石敷を施す。雨落溝は幅0.55mで、側石は石敷面よりわずかに高くなる。溝の深さは0.1mである。玉石敷は南辺調査区に比べてやや粗く、隙間が目立つ。

調査区北側には礎石が落とし込まれていた。1.5m大の巨石で上面が下になっていると思われる。落とし込まれた位置からみて側柱東南隅の礎石と推定される。なお落とし込まれた時期は近世以降である。

金堂基壇の築成について両調査区での調査から判明したことは次の通りである。すなわち基壇は掘り込み地業を行わず、自然堆積の砂礫層の上に造成される。まずほぼ基壇の範囲にマウン



第32図 東辺調査区遺構実測図 (1 : 80)

ド状に土を入れ、上面を叩きしめる。こののち周辺部に0.3mほどの整地を行う。この上面が地覆石・石敷の玉石を据える高さとなる。そののち基壇土が版築で築かれる。恐らく、周辺を基壇規模に垂直に削りとり、地覆石・羽目石を据えたと思われる。そして階段部分に凝灰岩小片を多く含む砂質土が入れられた。

出土遺物

瓦類の他、土器が少量ある。その他、金属製品に金銅製品・鉄釘などがある。

瓦類には丸・平瓦の他、軒丸瓦、軒平瓦、熨斗瓦、面戸瓦等があり、出土点数は第2表の通りである。軒瓦は創建瓦が全体の85%を占める。軒丸瓦では6276の出土点数が多いが、6121も少なくない。6276Aには瓦範が強く摩滅したA bが含まれ、A aとA bは胎土・焼成も異なる。軒平瓦は6641と6647の出土点数が拮抗し、6647の占める割合が平城京薬師寺より大きい。平城京薬師寺で6641の6割を占めた6641Gは確認できなかった。奈良・平安時代の軒瓦がわずかだが出土し、これらはすべて平城京薬師寺と同範である。この点は平成二年に行われた1990-1次調査の成果と一致する。また軒丸瓦・軒平瓦にはともに裳階用の小型瓦（6276E-6641K・6647I）があり、6641Kには顎面に朱線を残すものが1点ある。丸・平瓦にも小型品がある。丸・平瓦はコンテナ59杯分が出土した。丸瓦は玉縁丸瓦で、縄叩きののちナデ調整する。平瓦は粘土板桶巻き作りで凸面縦位縄叩きのものが多く、一枚作りの凸面縦位縄叩きのものがこれ

		東辺調査区	南辺調査区	合計			東辺調査区	南辺調査区	合計
軒 丸 平	6121 A	3		3	軒 平 瓦	6641 H	3	1	4
	" B	1	1	2		" K	3	1	4
	6276 Aa	4	4	8		6647 Cb	1		1
	" Ab	1	1	2		" G	2	1	3
	6276 E	4	2	6		" I	5	1	6
	6279 C		1	1		6681 C	1		1
	6308 A	1		1		小 計	15 (16)	4	19(20)
	薬師寺36	1	1	2	道 具 瓦 他	熨斗瓦	11	6	17
	不明	1	1	2		面戸瓦	1		1
	小計	16	11	27		隅切瓦	3		3
						刻印瓦		1	1

第3表 本薬師寺1991-1次調査出土瓦点数 () 内は種別・型式不明を含む

に次ぐ。東辺調査区の地覆石抜き取り出土瓦（丸瓦262片・平瓦423片）と礎石落とし込み穴出土瓦について創建瓦と奈良時代以降の瓦を破片数で比較すると、いずれも創建瓦が総数の6割前後を占める。

土器には土師器・須恵器・瓦器・陶磁器などがあるが、ほとんどが中・近世のものである。南辺調査区の階段前面の地覆石抜き取りから14世紀頃の瓦器が出土し、また東辺調査区の地覆石抜き取りには近世の土器類が含まれる。

まとめ

前回の調査成果と合わせて金堂基壇規模の復原を行うと、基壇は東西29.5m、南北18.2mとなる。これは平城京薬師寺の29.4m、18.3mと同規模であるといっ
てよい。金堂心と東西両塔心を結ぶ線との距離は29.7m（100尺）となり、平城京薬師寺の場合と同様である。また基壇築成についても掘り込み地業を行わない点や、基壇外装の地覆石、階段の状況なども同じである。基壇周辺部に玉石敷の犬走りと雨落溝を巡らせることも同じだが、犬走り・雨落溝については若干規模の異なる点がある。平城京薬師寺では階段前面が狭くなり、幅0.4mであるが、藤原京の本薬師寺では0.9mの一定した幅で基壇を巡ると推定される。また雨落溝も平城京薬師寺では0.5mの幅を有するものが階段前面で0.3～0.4mと狭くなるが、藤原京本薬師寺では幅0.55mで変わらない。

現土壇上には19個の礎石が残存するが、裳階の礎石は存在していない。今回の調査でも裳階の存在を示す直接的な遺構は検出できなかった。しかし前回の調査と同様に今回も小型の軒瓦が出土しており、裳階の存在を推定できる。

出土瓦は創建時の瓦が多数を占めるが、奈良時代から平安時代初めごろまでの瓦類も出土している。これらは平城京薬師寺でも出土している。このことは、平城京薬師寺から瓦の供給を受け、依然官寺として維持されたことを示している。しかし当代における建物の構造・規模などについては不明である。

以上のように今回の調査によって金堂の基壇の規模が復原でき、平城京薬師寺と等しいことが明らかとなり、また地覆石や周囲の玉石敷などの保存状態が良好なことも知られた。従って今後計画的な調査を行うことによって大きな成果をあげることができるものと期待される。